

【研究ノート】

ニュージーランド保育施設の保育環境

——学生がニュージーランド実習で見てきた保育環境——

原 田 明 美

Childcare Environment of the New Zealand Childcare Facility

—The Childcare Environment that a Student Saw in Childcare Training in New Zealand—

Akemi HARADA

はじめに

筆者は「保育内容演習 環境」の授業を担当している。その授業で、学生が日本国内の幼稚園実習・保育所実習をして、どんな遊びをしていたか、どんな遊具・玩具があったかを調べまとめた。今回国際教養こども学科の1年生がニュージーランド保育所での実習をしたのでその保育環境をまとめ、考察した。

学生が実習をしたのは、ニュージーランド北島ワイカト近郊である。ニュージーランドの面積は日本の70%で人口は約500万人であり、八巻^[1] (1995) は、「豊かな自然とフレンドリーな人々が生活している」「多民族国家、多文化国家及び人権国家」「日本人観光客の多い親日国家」「人口の15倍以上の羊がいる」「禁煙が徹底し、喫煙者が少ない」「男女同権意識が高く、女性の参政権が世界最初に確立した」「夫婦共働きはごく普通」「オフィスでは女性がお茶出しするのではなく、セルフサービス」「教員もネクタイを締める人は少なく、ファーストネームで呼び合う」「娯楽は少ないが、アウトドア・スポーツが盛ん」「社会全体がインクルージョン体制に向かっている」と書いている。この本は障害児特別教育と福祉のことが書かれている本で、保育のことは書かれていないが、保育の場でも、一人一人の個性が大切にされ、一人一人の自立を目標に毎日の保育が積み重ねられていることが予想される。ニュージーランドの保育施設の保育環境について学生のレポートを中心に考察した。考察の視点は、①日本の保育環境との比較、②それぞれの保育環境のねらいの考察である。

第1章 ニュージーランドの保育の特徴

ニュージーランドは、1986年に幼保の一元化がなされ、教育省で統一している。日本は、幼保一元化が望まれてはいるものの、実際は、幼稚園は文部科学省、保育所は厚生労働省、幼

保連携型認定こども園は内閣府で3元化になっている。ニュージーランドの保育制度について七木田^[2]は、次のように述べている。「義務教育の無償制、児童手当制度など、南半球の北欧と呼ばれるほどに豊かな社会福祉・社会保障制度を伝統的に維持してきた。しかし、1980年代になって、膨らみ続けた負債を返済するのが困難になったため大規模な行政改革を実施せざるを得なくなり、福祉・サービスの大掛かりな合理化が断行された。」「企業化、民営化が進められ、教育においても教育の自由化や受益者負担がすすめられた。」しかし、「ニュージーランドの奇跡」と呼ばれるように保育関係者や研究者の運動により、「就学前教育の分野では、公費負担」を原則とし、大学で資格を取る有資格者を増やすなど、保育の質を確保することが維持されている。そこには、「就学前教育には社会的に投資する価値がある」事が認められたことに「就学前教育改革の成功の秘訣」が見て取れるとしている。

ニュージーランドの保育は、テファリキに保育指針が書かれている。テファリキと保育所保育指針・幼稚園教育要領等を比較検討する。

	テファリキ	保育所保育指針・幼稚園教育要領など
背景	現場の保育者達が検討を重ねて作成した物	保育所保育指針は厚生労働省諮問機関で作成された(座長汐見稔幸) 2018年度改訂。
目的	誰もが抛り所となる敷物(織物・マット)の意味を持つ	指針は保育の内容・運営に関する事項を定め、各保育所の創意工夫で保育所の機能や質の向上を図る。幼稚園は学校に位置づけられ、人格形成の基礎作りとして要領に書かれている。
内容	原理の系(縦系) 「エンパワメント」 「全人格的発達」 「家族と地域」 「関係」 要素の系(横系) 「幸福」(心と体の健康・自己が備える潜在性と可能性を意識しながら、過去から未来への展望を抱く) 「所属感」(環境とアクセス・文化的アイデンティティや母語への接続) 「貢献」(人々・仲間や教師との良好な関係、子ども達には友達がいる) 「コミュニケーション」(コミュニケーションと言語・言語のレパートリーを増やし、象徴機能を発達させられるように支援を行う。物語を楽しむ場面では子どもと大人との間に相互関係が生じる) 「探求」(最も広い意味での世界・価値ある探求とそれを意味付けする過程が複雑に絡み合う場面が多くなる)	環境を通して養護と教育を一体的に行う。
		養護：子どもの生命の保持及び情緒の安定を図る。
		5領域：「健康」・健康な心と体を育て、自ら健康で安全な生活を作り出す力を養う。
		5領域：「人間関係」・他の人々と親しみ、支えあって生活するために、自立心を育て、人と関わる力を養う。
		5領域：「環境」・周囲の様々な好奇心や探求心をもって関わり、それらを生活に取り入れていこうとする力を養う。
		5領域：「言葉」・経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に関する感覚や言葉で表現する力を養う。
		5領域：「表現」・感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。

教育制度

	ニュージーランド			日本		
26歳	高等教育	大学院		26歳	大学院	
25歳				25歳		
24歳				24歳		
23歳				23歳		
22歳				22歳		
21歳	中等教育	大学		21歳	大学（4年・2年）・専門学校	
20歳				20歳		
19歳				19歳		
18歳				18歳		
17歳				17歳		
16歳	初等教育	高等学校（フォーム3～7）	通信制学校	16歳	高等学校	
15歳				15歳		
14歳				14歳		
13歳				13歳		
12歳				12歳		
11歳	幼児教育	中学校（フォーム1～2）		11歳	小学校（義務教育）	
10歳				10歳		
9歳				9歳		
8歳				8歳		
7歳				7歳		
6歳		初等学校（スタンダード1～4・ジュニア1～2）		6歳	幼稚園（3歳から）・保育所（0歳から）・幼保連携型認定こども園（0歳から）・小規模保育所・認可外保育所・ベビーシッター・企業主導型保育所等	
5歳				5歳		
4歳				4歳		
3歳				3歳		
2歳				2歳		
1歳		保育所・幼稚園・家庭託児所・プレイセンター・コハングアレオ		1歳		
0歳				0歳		

文化や保育の特徴と比較

	ニュージーランド	日本
多文化共存	1制度2文化として位置づけ、マオリの文化とマオリ語を必ず保育に取り入れている。	日本文化以外の文化を教科書などでは教えていない。
人権意識	人権意識が高く、男女平等も進み、ジェンダーギャップ指数ランキング2019では4位（男女共同参画ホームページより）	憲法に基本的人権が書かれ、子どもの権利条約も批准しているが、人権教育は低く、ジェンダーギャップ指数121位（同左）
運営	ほとんど政府の公費補助金で運営されている。週20時間無料。私的負担については調査中である。	保育所に関していえば、公立と私立があり、今は企業立も増えた。2019年10月から3歳以上は保育料が無償化され、消費税で賄われている。0歳から2歳も公費の補助があり、保育料は所得に応じる受益者負担であるが、私立では高額な保育料の所もある。3歳以上の保育料は無償化されたが、給食費は有料となり暖房費や改修費、制服やカバンなど私費負担をする園も多い。
特徴	幼保一元化が実現（1986年）マオリ文化を内包している。	幼保は一元化されていない（内閣府・文部科学省・厚生労働省）
保育方法	「ラーニングストーリー」（学びの物語）のアセスメントと、「学びの構え」で、個々の子どもの気持ちの内部まで読み取る。 ドキュメンタリー保育の発祥の地	保育計画→実践→省察→検討→再実践→評価

クラス	5歳の誕生日までの在園であり、翌日から小学校へ行くので、ばらばらと卒園し、5歳以上の子どもはいない。主に、トドラークラス（3歳・4歳）キンダー・ヤングクラス（4歳から5歳）とわかれ、生後6週間から3歳未満のインファントクラスがある。	0歳（産休明け）から就学前までの子どもが在園し、主に年齢別クラスで保育することが多い。最長6歳11か月の子どもまで在園する。（年長5歳児クラス）
配置基準	0歳・・乳児3人に教師1人 1・2歳・・乳児4人に教師1人 3歳児・・子ども5人に教師1人 4歳児・・子ども8人に教師1人 待機児童はいない	0歳児・・乳児3人に保育者1人 1・2歳児・・子ども6人に保育者1人 3歳児・・・子ども20人に保育者1人 4・5歳児・・子ども30人に保育者1人 待機児童がいる
規模	1園20人から50人の規模が多く、平均30人程度。毎日（月～金）登園する子は、少なく、定員（登録園児数）に対して登園児数は少ない。	認可保育所では、1園100人から200人。ほぼ、全員が毎日（月～金）登園する。子育て支援により、土曜日保育、日祝日保育をする園も多くなってきた。
日課（デイリープログラム）	概ね7時半から8時半ごろに登園、スクールバスなどはない園が多い。マッタイムとして、子どもが全員集まり先生の話を聞いたり、絵本を見たり、歌を歌ったり、話し合う時間はあるが他は一日中自由遊びである。午睡もある。先生が声を掛けて製作等するが、あくまでもやりたい子のみであり、数人で行われている。午前と午後におやつがあり、降園は3時半から5時ごろ。	保育所は8時間保育が原則ではあるが、保護者の就労保証の為、朝7時から夕方7時までと11時間以上開園している園も多い。幼稚園は4時間保育が原則ではあるが就労する母親が多くなり夕方5時ごろまで預かり保育をする幼稚園も多くなった。午前中は一斉保育の時間がある園が多い。乳児・幼児共通して室内での保育時間が長いことが多い。幼保連携型認定こども園も増えてきた。
給食・おやつ	原則として、おやつ・弁当は持参の園が多いが、中にはおやつや給食を提供する所もある。保護者が作る弁当は、サンドイッチとかフルーツとか比較的簡単な物が多い。子どもたちは残すと保護者に知らせる意味で弁当箱に残す場合と、廃棄する園がある。メモをする園もある。また子どもに全量食べ物を強要する園は無い。おやつは午前と午後に有り、保育者もお茶お菓子を食べる。保育者と子どもはおやつも給食も一緒に食べない。（交代で別室にて食べる）	保育所は、調理室が完備され調理員や栄養士も配置されており、栄養に配慮された手作りの給食・暖かい食事が提供される。幼稚園は調理室の設置義務が無く、弁当持参又は外注での弁当となっている。
行事	ほとんどない。ハロウィンパーティやクリスマス会・誕生会・父親の日などあるが、何日も前から保護者に見せるために練習することはなく、先生や保護者と一緒に楽しむことが中心となっている。	一大行事の運動会や生活発表会、作品展などがあり、その準備に1か月前から練習したりする。直前になれば毎日練習という園もある。それは保護者のニーズに応える場合も多い。またそれ以外に七夕や節分・誕生会など行事が多く、行事中心の園もある。反対に行事を楽しむことをメインにし、子どもや保育者に負担が大きくならないように工夫する園もある。
クッキング	基本的に室内で、調理を行う事はない。しかし子どもとクッキーの片抜き等をする園もある。	食育基本法が制定され、食育が強調され栄養面や楽しく食べることが重視されている。その一環として可能な範囲で子どもとクッキングをする園が多くなった。またもちつきなどを行うところもある。

考察

今回は環境の比較であり、保育指針（テファリキ）そのものの比較検討ではないが、1点差異があるとすれば、テファリキにあって保育所保育指針、幼稚園教育要領に無いものとして、「所属感」があるといえる。「所属感」とは、自分の居場所であり、自分を発揮する場所であり、そして自分のアイデンティティーを形成することである。それが保育所保育指針や幼稚園教育要領の中に見出すことが出来ない。また、ニュージーランドの保育の特徴として、「ラーニングストーリー」（学びの物語）がある。これは、大宮勇雄などによって和訳され、詳しく紹介

されている。ラーニングストーリーは保育者が一人一人の子どもの発見やつぶやきに注目することによって、より子どもを理解し、子どもは何に興味を持ち、何を知りたがっているのか、そして何に困っているのか等、子どもを理解する、そして援助を考えるのに役に立つ。決して、保育者が「子どもの前に立って教える、指導する」という立ち位置ではなく、子どもの声や目線、表情を読み取することを主としながら、保育方針を考えていることが分かる。そういった点では、イタリアの保育レッジョ・エミリアにも共通するものであるし、日本の保育所保育指針・幼稚園教育要領とも共通している。

保育の仕方、ニュージーランドと日本の大きな違いは、学生からは「ニュージーランドでは一日中ほとんど自由遊びだった」という声が多い。しかし自由遊び＝放任ではないことを、学生は学びとっている。「環境設定に配慮していて毎日玩具の種類を変えたり遊具の場所を変えたりしている。」「子どもの観察を良くしていてタブレットでメモしたり、写真を撮っている。ドキュメンテーションの保育をしている。」「テファリキに添って保育していることがなんとなく分かった。」などの声もあった。

ニュージーランドの保育者は、個人個人の優しさ、厳しさの違いはあるが、概ねフランクで、話し好きで保護者ともよく話していた。そして、学生にも親切である。「困っていることない？」とよく聞いてくる。午前と午後にあるモーニングティーとアフタヌーンティーは、お菓子とお茶を飲み、保育者にとっても休憩とミーティングを兼ねているような時間帯である。そのような雰囲気の中で、学生は「先生がとてもやさしい。」「なんでも聞ける雰囲気がある」（でも英語力が無くて聞けない事も多い）と、居心地の良さを感じている。だから子ども達も、居心地の良い楽しい保育所になっていると想像できる。

ニュージーランドは規模の小さな施設が多く、そしてその数が多い。1施設は乳児グループのみの園、幼児グループのみの園、そして両方のグループがある園など様々である。その為、1施設20名から50名程度のグループ保育で異年齢保育であり、日本の様な一学年毎の年齢別の保育は無い園が多い。保育記録からも、子どもの名前は記入しているが年齢は記入していない。その子どもの年齢にはあまり固執していないことが分かる。日本では今何歳かをかなり気にしている。つまり、何が出来るか出来ないかを年齢で判断するので、「2歳だからこうだね」、「2歳なのにこうだね」と年齢を基準に子どもを評価している。日本では善きにしろ、悪きにしろ年齢での評価をするため障がいを見出しやすく、また遅れを気にして保護者は焦りや不安が生じてしまうのではないかと考える。その点、ニュージーランドでは、年齢での判断比較ではなく、子ども同士を比較してみるのではなく、その子どもそのものの姿をしっかりと見ている。今の子どもの姿を尊重し、どのように遊び込んでいるか、何に関心を持ち楽しさを味わっているのかを重視している。小学校への準備としてではなく、今の時を楽しんでいることが分かる。「今・ここにある」生活を大切にしている。まさにインクルージョン的視点であると考えられる。そしてその時を、その場所での遊びの楽しさをしっかり感じて遊びこんでいる事を大事にしているように感じる。それが生きる土台作りになっていると考える。日本では保育者が保育計画や指導案をしっかりと準備し、どのように保育を進めるかを保育者主導で行っている。悪

く言えば計画通りに保育をこなすことに精一杯になり、子どもの気持ちをおもんばかりの余裕がなくなる懸念もある。又は計画通り進めるために、子どもを励まし、頑張れ頑張れとひっぱりあげる保育になっているのではないだろうか。特に運動会や生活発表会、作品展や文字指導・漢字指導にそれを見て取れる。ニュージーランドでは計画はあるものの、毎日どのように遊びどのように進めていくかを子どもに委ねているところが多い。しかしすべて委ねるのではなく、子どもの発想を取り上げて発展させたりもし、また季節に合わせて作品を作り掲示したりしている。それは一斉保育の中で製作するのではなく、やりたい子どもを中心に何日かをかけて製作している。

第2章 学生が実習を行った保育所での保育と保育環境

学生は、ホームステイしながら、2・3人のグループに分かれ、12か所の保育施設で実習を行った。学生はまだ、テファリキなどの保育方針は十分理解していないが、約2週間保育実習をする中で保育環境や保育者の行動・声掛け、および子どもの姿から学ぶものは多かった。

主に保育環境を日本と比較しながら考察する。

1節 どのような玩具があったか

保育室内にある玩具		
	ニュージーランド	日本
操作的遊び	ビー玉・ハサミ・のり・紙・蝶結び用靴・シャボン玉・ミニカー・電車・パズル・文字パズル・紙を破る・ボールプール・音のなるグラス・ビーズ・磁石でくっつく玩具・折り紙・シール・粘土（水・小麦粉・油で作ったもの）	手遊び・シール（1歳半過ぎは可能です）・ぽつとん落とし・紙をやぶる・紐とおし・ボール・プランコ・すべり台・粘土・パズル・紐通し・手遊び・ボタンはめ・はさみ・手遊び・紙をちぎる。パズル・独楽・あやとり・折り紙・蝶結び・ビカビカ泥団子
構造的遊び	レゴ・ブロック・スコップ・シャベル・じょうろ・積み木・Father's dayの製作・線路・アルファベットの積み木・木工用品（くぎ打ち）・フィンガーペインティング	積み木・パズル・井形ブロック・ブロック（レゴ）・砂遊び（山・プリンを創る）パズル・汽車・粘土・デュプロ・積み木・砂遊び（山）・ドミノ・折り紙・カプラ・木工制作
造形的遊び	絵具・ペン・鉛筆・画用紙・はさみ・のり・テープ・粘土・お店屋さんごっこ用品・工作・ビー玉・のこぎり・金づち・黒板とチョーク・卵のパックにアイスの棒をさす・クッキーの飾りつけ・スライム・井形ブロック・日によって変わる工作	フィンガーペインティング・シール貼り・たんぼん・砂遊び・なぐり書き・おはじき・粘土・砂遊び・おはじき・紐通し・ステンシル・マーブリング・のり（製作）・泥遊び・簡単な工作（セロテープ・はさみ）・アイロンビーズ・絵を書く（絵具）おもちゃづくり・お店屋さんごっこの材料づくり・空き箱制作・泥団子・工作
役割遊び	人形・皿・コップ・キッチン・買い物ごっこ（かご・お金・レジ）・ままごと用（ドレス・小さいベッド・靴・靴・くし・ブラシ）・本物の壊れた（レンジ・電話・ヘアアイロン・キーボード・携帯・ヘッドホン・カメラ・ビデオ）ヒーローごっこ・タクシーごっこ・お姫様ごっこ・美容師ごっこ・コック屋さんごっこ・犬の散歩ごっこ・着替えるコスチュームがたくさんある	模倣遊び（食べる・飲む・寝させる真似）再現・世話遊び ままごと・人形ごっこ・お医者さんごっこ・レストランごっこ・お風呂ごっこ・買い物ごっこ・電車ごっこ・乗り物ごっこ・ヒーローごっこ・劇ごっこ・しっぽとり・フルーツバスケット・劇ごっこ

知的認識遊び・言葉・音楽リズム	絵本・図鑑・タブレット・CDでダンス・歌（マオリ語）・楽器（ウクレレ・マラカス・タンバリン・鈴・マオリの楽器）・Youtube・ヘッドショルダーニーズエンドトーズ・歌（幸せなら手を叩こう・キラキラ星・マオリ語の歌）・わらべうた・手遊び・ピタゴラススイッチ・UNO	絵本・わらべうた等 「だるまさんが・と・の」「いないいないばあ」・ころころたまご・にんどころ・きゅうり・きやべつ・「かいぐり」「くつついた」「いないいないばー」「あがりめさがりめ」「もこ もこもこ」「ころころころ」「しろくまちゃんのホットケーキ」・だんご・アンパンマン・「げんこつやまのためきさん」・「がたんごとん」ぎっこんぱったん トランプ・ボタンの紐とおし・絵カード・積み木・モザイク・図鑑・リズム感覚・聴く力・音楽・UNO・パズル・ルービックキューブ・オセロ・ピタゴラススイッチ
室外にある玩具・花壇・畑・小動物など		
運動遊び	すべり台・ボール・フラフープ・ホース・タイヤ・平均台・三輪車・ぼっくり・木登り・砂場・バランスポール・サッカー・二輪車（ペダル無し）・うんてい・トランポリン・ミニクライミング・変わったブランコ・総合遊具・ステージ・側転・ジャンプ・階段から飛び降りる	追いかけて遊び・車・すべり台・ブランコ・高い高い・ボールころがし・散歩・ひざの上ぴよんぴよん・ボール・階段・はいはい・箱（歩行器）押す・ブランコ・かけっこ・ボール・水遊び・平均台・階段上りおり・プール・三輪車・追いかけて隠れ遊び・木登り遊び・すべり台・ジャングルジム・鉄棒・フラフープ・ぼっくり・鬼ごっこ・うんてい・ドッチボール・けんけん・水遊び・転がる・なわとび・足じゃんけん・パルーン・一輪車・スキップ・竹馬・ドッチボール・靴とり・陣地とり・逆立ち・側転・雑巾がけ・リレー・独楽・跳び箱・組体操
自然科学（食育）	金魚・インコ・うさぎ・玩具の虫、恐竜、トカゲ等・花壇・動物と触れ合う・収穫（鶏の卵）・花を摘む・虫取り・松ぼっくりを拾って遊ぶ・ウッドチップで遊ぶ・クッキング（ホットケーキ・ワッフル・スコーン）・水たまりで遊ぶ・草を抜いたりして遊ぶ・石・貝殻・土に触れる・木に触れる・芝生に寝転がる	虫を見る・花を摘む・ぼーろ・散歩・たんばぼの綿毛・動物と触れ合う 手掴みで食べる 虫をみる。ダンゴムシをみつける・花をつむ・クッキング（ホットケーキ・白玉団子）・川遊び・動物と触れ合う・野山で遊ぶ虫を捕まえる・虫の観察・花を摘む・クッキング・草木の遊び（花相撲）・川遊び・小動物と触れ合う・栽培・収穫の喜び 野菜の栽培・クッキング・虫の世話（カブトムシ）・箸の練習・木登り・野菜の栽培・クッキング・虫の世話・小動物の世話・木に登る・プラネタリウム

考察

ニュージーランドと日本の室内にある玩具の種類はあまり大きな違いは無いようであるが、その数はニュージーランドの方が多く感じた。日本の例は50か園以上の玩具・遊具の集計であり、1園にあるものではないので単純な比較はできないが、子ども一人当たりの玩具の数はニュージーランドの方が多いであろう。学生はニュージーランドの方が玩具が豊富であることにびっくりしたようである。そして、自由に使い、自由に遊ぶことに学生はびっくりしている。ニュージーランドでは、危険なもの以外は特に使い方を指定せず、子どもの試行錯誤に任せているようである。そして、大きな危険が無い限りは止めない。例えば、色水を容器で移し替える遊びをしていてその水を飲んでしまったり、水たまりでだんだん激しい遊びになって泥んこになっても止めることは無い。保育者は笑って見ている。様々な経験から子どもは何を感じ何を学んでいるかを察しているようだ。

大きな特徴は、ニュージーランドは日本でいうコーナー保育が徹底充実しているといっている。異年齢で園全体が一つのクラスなので、一学年毎の保育室は無い園が多いが、チェーン企

業の園では日本の様に一学年毎の保育を保育室で行っている。保育室内はコーナー保育で占められている。そして子どもは自分の好きな場所で、自分の好きなように、工夫しながら遊んでいる。保育者はあまり口出しをしない。コーナー保育といっても、衝立のように仕切られたスペースに分かれているのではなく、広い室内に、机や棚に、玩具が置かれていて保育者は一人保育室内に居れば、子ども達の様子が全部把握できる。しかし声が騒然としているかといえ、子どもの人数が少なく、保育者が大きな声を発することもなく、子ども達の声が聞こえる程度であり、子ども同士のトラブルや泣き声も聞こえるが、多くは遊びに集中しておりそんなに苦にはならない騒音となっている。ドアはどこでもオープンで部屋から部屋へ、又外へ出入りは自由である。日本では担任の指導の元、年齢別クラス別保育であり、子どもはどの保育室で保育されるかは決まっている。ある園では室内で机に向かっている時間も長い。勝手に他の部屋へは行ってはいけないし、部屋のドアは閉められている。静かな場所や一人になりたい場所は、各子どもに見つけにくく居心地の悪さが日本にはあるのではないかと考える。

また玩具での特徴は、本物志向があるため⁽¹⁾、例えば年齢が4歳ぐらいの子には、のこぎり、金槌なども自由に使用されている。もちろん保育者の目の届く範囲内である。日本では安全管理が強調されているため、ハサミも保育者の管理の下、使用時間や使用方法が決められているところが多い。安全管理をどこまでにして子どもに使わせるのか、日本では保育者間の話し合いが欲しい。人形は肌の違いが分かるものであり、又リアルな恐竜や昆虫のおもちゃもある。そしてどの園でも壁面には、マオリ文化の物が掲示されており、また各国の挨拶なども掲示されている。また、各園ではホースやビニールプールで水遊びをしたり、泥んこになって遊ぶ姿もあるが、日本にみられるような大きいプールはない。推測であるが、ニュージーランドではアウトドアのスポーツが盛んで、各家庭で海や川でレジャーを楽しむため保育園にプールが必要なのではないだろうか。学生のレポートによると、園によって異なるが、毎日のようにテーブルの上の玩具の準備を変えたり、園庭の遊具の位置を変えている園もある。また、特徴的なのは、保育準備を子どもと一緒にを行うため、保育者が残業して準備したりすることは無い。反対に、子どもは保育者が準備するのを、目をキラキラさせながら見ていたり待っていたりしている。筆者も、保育準備は日本のように子どもが見ていない所で保育者だけで準備するより、子どもと一緒に試行錯誤しながら準備したほうが子どもにも興味関心も持つことができ良いと考える。

2節 建物の間取りと保育者の関わり

ニュージーランド

大きな園では幼児クラスと乳児クラスに保育室や園庭が分かれているが、分かれていない園では、子どもたちは園内の好きな場所で好きなように遊んでいる。毎日気に入ったところで遊んでいるようで、少しずつメンバーが変わったり遊びが発展したりしている。保育者は一緒に遊ぶより、見守っていることが多い。しかし子どもの興味関心を広げるために、また子どもの関心を深めるために環境構成を変えたり、声掛けをしたり、一緒に笑いながら遊んでいる。

トイレ

フリー

動物・人形

キッチン

絵

積み木

棚

絵本

机

と

椅子

棚

ソファで寝ている子

ままごと・コスプレ

トイレ

製作

パズル

粘土

自由にって絵や工作が出来る棚もある。午睡は他の部屋で行う。

ハサミ

カラーペン

Egg pac

papers

プチプチ

magazine

テープ・リボン

etc

砂場

ミニハウス

黒板・絵

工作

小山

すべり台

すべり台

ミニハウス

ミニハウス

フリー・ランチ

ベンチ

自転車

樹木

橋

各園が、様々な間取りであり、又環境が違う。街中の園ではショッピングモールの中に作られ、大きな駐車場が目前で散歩が難しい状況の園や、園の前に広大な羊の牧場があり、目の前で羊の様子を見ながら保育している園など様々である。散歩も回数の多い園と少ない園がある。共通しているのはどこの園も1階にあり、又は戸建てであり、また広さには様々あるが人数に対して広く、そして必ず外遊びの空間が作られ、砂場や遊具があり、木が生い茂る園もある。地面は土であったり、芝であったり、ウッドチップが敷かれたりして安全性に配慮されている。園庭は日本のような運動会が出来るような、そして樹木が無い平坦な地面はなく、階段や高低差があり、遊具や樹木もあり木登りも許され変化に富んでいる。しかし大人の背丈以上の高い遊具はない。子どもは一日中でも外で遊びほうけることが出来る。

日本

基本的に年齢別保育なので、1つの保育室で遊び、食事をし、午睡する。その為、何回も片付けや掃除の必要性がある。保育者は充分な指導案の作成を行い、指導案に沿って子どもに遊びを提案したり、援助したりしている。遊びに必要な教材は保育者が準備する事が多く、その点で保育者の保育準備の時間が多くなっている。日本は定員が多いためか、2階建て以上の建物が多く、乳児室が2階である園も多い。園庭は運動会が出来るような平坦ないわゆる運動場になっているところが多い。そして隅に鉄棒やブランコ、総合遊具などが設置されている。樹木や草などは少ない。花壇はあっても立ち入り禁止で花を摘んだり出来ない。しかし、畑など工夫してつくり野菜の栽培やさつまいも作り、稲作りを行っているところもある。各園が何を大切にしているかが大切である。日本では一斉保育の形式が多く保育室内は机といすが大半をしめ、コーナー保育をする余裕がない園も多い。時間に区切られて保育することや手洗い等順番を並んで待つことも多い。

考察

ニュージーランドと日本の大きな違いは規模の違いで、日本は100人以上が多く、ニュージーランドは30人から50人が一般的である。日本は各年齢別の保育を各保育室で行うので、自分のクラス・自分の城という認識になりやすい。ニュージーランドでは、日誌にも年齢を書かない場合が多く、ラーニングストーリーを作成している。個人を尊重している事が分かる。レイチェル・バーク (2017)^[3]によれば、「ニュージーランドと日本の保育環境は、それぞれの社会が望ましいと考える子ども像を反映して構造化されており、子どもの身体にその構造の課題が投影されている」としている。つまり、日本においては訓練や活動、時間や空間の統制によりつくられた「身体」となり、並ぶ・待つ・速やかに移動することなどを通して、忍耐や我慢・規律を身に付ける。ニュージーランドでは待つことは時間の無駄ととらえ極力並ぶ必要のない保育を行っている。加えて、声(言葉)を出して言うこと、しかし大声は発しない、子ども同士の身体的接触(叩くなど)はなるべく避け、主体性を求めている。テ・ファーリキでは「子どもが社会や文化に対して受動的になるよりも、自らが積極的に周りの環境を探索しながら学

びを生起させること、大人たちは必要な場合にのみ支援を行うことが推奨されている」。日本の保育所保育指針にも「主体性」「積極性」「自立」の文字が並ぶが、先の訓練的活動にそぐわない文字で、保育者の苦勞が想像できる。

子どもは世界共通で、よくケンカをする。しかし、ニュージーランドでは保育者は比較的に見守っていることが多い。自分たちで何とかしようという意識も高く子どもで解決している場合もある。年齢が低い場合はそれが出来ず、先生が関わることも多いが、基本は子ども同士の意見を聞き、どうしたかったのか、何が嫌だったのかを聞いている。ニュージーランドでは自己主張をすることが良いとされているのか、喧嘩が多いと感じた学生もいる。筆者は乳幼児期にしっかりと、たくさん喧嘩をしたほうが良いと感じる。喧嘩は人との関わりそのものであり、人との関わり方を身をもって体験できる場である。自分の思いを素直に出せる時期に十分喧嘩をしたほうが、人との関わりを学べる良い機会だと思う。そして学生は「ニュージーランドの子どもは自立している」という印象を受けている。

3節 どのように遊んでいたか

ニュージーランド

ニュージーランドでは、日本の朝の会に似たことをマットタイムと言い、絵本や手遊び、話し合いをする他は、一日中自由時間で、子どもたちは自分のやりたいことを自分で考え好きなように遊んでいる。置いてある材料や教材を自由に使うことが出来、製作や木工などをする。のこぎりや金づちなども使っている。板なども使い、坂にして車を走らせたりしている。遊具からも飛び降りたりして遊ぶ自由度が高い。学生は「ハラハラするときもあった」と述べている。でもそのような時も保育者は笑顔で見守っていたことが多いという。遊びの内容は、外では「おにごっこ、砂を使ったお店屋さんごっこ、水遊び、ボール遊び、すべり台、木登り、かくれんぼ、三輪車、スクーター、うんてい、虫を見つける、蝶の羽化を観察、ネット登り、松ぼっくり・みみずなど自然の物を集めて観察、タイヤ渡り、浮き輪のようなものでぶつかりっこ、ハンカチ落としのようなゲーム、シーソー、戦いごっこ、楽器を使って演奏会、船、ロープにぶら下がる、ローラースクーター、高い巧技台から飛び降りる、ステージで自由に踊ったりしている、泥遊び、お掃除遊び、タイヤ跳び、キックボード、二輪車（ペダル無し）、シャボン玉、手遊び」等である。

室内では「道路が書いてあるマットの上でミニカーを走らす、ままごと、粘土、ブロック、パソコン、パズル、お絵かき（絵具・ペン・クレヨン・色鉛筆）、紙飛行機を作る、絵本、積み木、フェイスペイント（先生にしてもらう）、（動画を見て）ダンス、なりきりごっこ（ドレスや消防服等の衣装）、ビー玉ころがし、製作（ハサミなど使用）、椅子取りゲーム、歌、人形ごっこ（髪をスタイリングする等）、恐竜ごっこ、工作（金づちやのこぎりがある）、トランポリン、バランスボール、家族ごっこ・役割ごっこ、ドミノ、ジップブロックの中にスライムを入れて感触遊び、大きな皿にシュレッターの紙を入れてペーパープールとして楽しむ、チラシを切って画用紙に貼り一つの絵を作る、色水遊び、ビーズアクセサリー、クッキング（みかんの

皮をむく、芋の皮をむく)、ゲーム(マオリ語)、iPad、虫メガネ、ピアノやオルガンの設置は見られずCDを使う場合が多い、模倣遊び・お世話遊び」等をしている。

学生の書いた記録から下記の様に引用する。

- ・女の子がのこぎりで木を切っていた。かなづちを使って釘を打っている子もいた。
- ・誕生日会(5歳になった日)(卒園して明日から小学校へ行く)は、英語とマオリ語の両方でHappy birthdayを歌う。その子の希望する絵本を読んだり、他の子どもからメッセージを言ってもらったり(みんなが手を挙げて発言していた)、レインボーケーキを食べて、最後に先生が入園してからのラーニングストーリーを読み上げた。その子の保護者も参加していた。
- ・保育者は、泣いている子がいたら抱きしめ、頭をなでていた。
- ・近くの広場にお散歩に行き、サッカーをやる。散歩中は二列に並んで大きな子が小さな子と手を繋ぎ、嫌がる大きな子には、「あなたは、Bigboyだから次回は我慢できるね」と言って次の約束をしていた。試合が始まると保護者特に父親が応援に来ていた。
- ・砂場で子どもが座り込み、自分の足に砂をかけ始めた。そしたら先生も一緒になって砂をかけ、下半身に砂に埋まるくらいになり、先生がどんな感じがすると聞いていた。
- ・日本より喧嘩が多く、激しいと思った。(自己主張をしっかりとっている)
- ・多くの子が自分のラーニングストーリーを持ってきて見せてくれて一つ一つ写真を説明してくれた。
- ・日本だったら危なくて止めるようなことをニュージーランドでは普通にやっていた。(すべり台の反対のぼり、すべり台を頭からすべるなどしても先生は止めない)
- ・先生は見守っていることが多い(服が泥だらけになっても、少し砂を食べてしまっても)
- ・子どもは、すぐに先生に言いつけたり、頼ったりせずに自分たちで解決していた。
- ・絵本を外で読んだり、ランチを食べたり、そしてサッカーを室内でやっていた。
- ・近くのお花畑のようなところに散歩に行く、そこから結構険しい森の中を歩いて公園に行くとは日本にはないような遊具があり、危ない遊具もあったが先生はそばにいた。
- ・フェイスペイントをよくしている。(子どもがやりたいものを顔に書く)
- ・ブランコに乗りたくても使われていて、あまり話せない小さい子が譲ってもらえず、隅に行き、すねる。(学生が変わってと言っても変わってくれなかった)だいぶ経った頃に空くと乗っていた。
- ・毎日鞆を持ってきて、中に着替えが入っている。子どもは着替えたいとなると自分で着替えていた。先生は指示することは無く、何回も自分で着替える子がいたり、どろんこでも着替えられない子はそのままだった。
- ・Babyクラスに先生の子どももいて、先生が母乳をあげていた。びっくりしたのは、他の子にも母乳をあげていて、男性職員がいても胸を出してお乳をあげていた。
- ・音楽をかけていて、子どもたちはのりのりで踊っていた。
- ・Father's dayでは、子どものメッセージを先生はホワイトボードに書いて、それを子ども

と一緒に写真に撮り、その写真をメッセージカードに貼り、その準備を子どもたちと一緒に作っていた。

- ・玩具が豊富にあると感じた。部屋も広い。園庭も広い。
- ・室内でテントを張ると子どもたちは興味津々でたくさん中に入ると入り過ぎで壊れてしまう。先生が立て直すと、子どもたちは人数を決めて入ったり、順番に入ったりしていた。
- ・自由に遊ぶからか（すべり台も反対のぼりする子が圧倒的に多い）、運動能力が高い。（怖さを感じるようなところから）飛び降りる、筒（土管のような）の上でサーカスのようなことをしている。
- ・ニュージーランドの方が、子どもが自立している。自分たちで解決しようとしている。あまり先生に頼っていない。
- ・モーニングティーやアフタヌーンティーは食べたくなかったら食べなくても良い。ランチも自由で、食べたくなったら食べていて、席が無かったら空くまで遊んで待っている。（先生は椅子を持ってきて増やさない）（園によって異なる）
- ・雨でも外で遊んでいる子がいる。
- ・先生の言葉には「please」「thank you」が多く、子どもに注意するときは「look at me」と言っていた。
- ・マオリ文化の週があり、マオリの絵本を読んだり、マオリ語を使って文化を紹介したり、壁にはマオリの家が分かるように描かれたり、他の装飾品が飾られたりしていた。
- ・自転車に乗る時はヘルメットを被るがかなりスピードを出している子もいた。（スピードを落とさずにカーブする）
- ・送迎は父親が多い。

日本

遊びの内容は、ニュージーランドと変わらないが、最近ではダンス（リトミック）・体操・英語・絵画などは、外部講師に依頼する園も多くなった。外部講師に依頼する場合何を教えるか、何を知り身につけさせるかは明確になっているが、目の前の子どもの姿に合わせて柔軟に内容を変更するのではなく、又考えさせる力を育てるのではなく極端に言えば、子ども達が外部講師の指導に合わせているように感じる。本来、保育者は大学や専門学校で学び、専門的知識を得て、資格や免許が授与されている。しかし、外部講師を依頼している園では、外部講師の指導の為に子ども達に心構えを伝えるなどの準備に保育者は労力を費やすことになる。本末転倒のような気がする。子どもの指導：援助保育そのものに保育者が力を発揮することが望ましい。

2018年、保育所保育指針等の改定で、「幼児期までに育みたい姿」が追加された。小学校の準備期間と位置づけて、文字指導・漢字指導・算数の指導などをドリルやフラッシュカードを使って指導する園もある。反対に「遊びを通して」援助・指導を考えているところも多く、どの園に入園するかを選択は保護者に任されている。日本では小学校へ上がるまでに力をつけたいと、保護者のあせりや不安が高じ、文字指導や漢字等覚える事、出来ることに重点を置きが

ちである。また年長になると先生の話をしっかり聞く、給食を20分で食べる。次はどんな行動するのか自分で考えるなど、小学校へ上がるための訓練機関になっているところもある。

各保育室にはピアノ又は電子オルガンが備置されており、それを使用する場合が多い。つまり保育者にはピアノの技量が必須とされている。以上の点がニュージーランドとの環境の点での差異と考える。

しかし、本来の保育の視点は両国とも変わらないと認識している。それは「子どもは遊びを通して育ち、成長し、保育者は環境を通して保育する」という視点である。乳幼児期は充分遊びこむことがもっとも重要で、その為に環境構成が必要である。子どもは遊びを通して身体能力が育ち、物事に対する興味関心・意欲が育つ。遊びの中で試行錯誤しながら工夫し、挑戦し、そして友達と協力する中で喜びや達成感を味わう。あるいは、友達と喧嘩する中で、自分の思いを出すことや相手の思いを知ることを学び、社会性や人間性を育てていく。成長著しい乳幼児期に遊びや経験の中で知的好奇心が育ち、科学的思考や創造力・想像力も育つ。子どもが安心しながらも、意欲的に自分を発揮しながら環境と関わっていることが大切である。その環境の重要性への認識は両国一致していると考ええる。しかし、日本の環境は、玩具の選定や配置にももう少し丁寧な配慮が欲しい。園によって差があるが、玩具に十分な予算が無いため、廃材や100円グッズが使用されている園もある。また玩具の配置も子どもの遊びの集中や盛り上がりも考慮されず、雑然と置かれている園もある。幼児教育と言われると、何か机に向かって教えるイメージが強いが、筆者はもっと遊びの経験を豊かにし、遊びから子ども達は学ぶべきだと考える。その点はニュージーランドの環境の配慮に色濃く感じる。日本は保育者の質を上げ、「子どもの気持ちを尊重し、応答的な保育」^[4]ができる事を誇りにしている。そこも重要な点である。それが生かされる職員配置などの環境の改善を望む。

2019年の年末に小学校5年生と中学校2年生の体力測定の結果がスポーツ庁より公表され、体力が過去最低となり、「愛知県が最下位」^[5]の結果となった。外遊びも含めた運動的遊びが減っていることを示している。それは環境によるところが大きい。乳幼児期の健康や体力をどう身に付けていくかも現代の課題である。その課題に対して乳幼児期を担う保育者の責務は大きい。

おわりに

ニュージーランドの保育環境について、主に学生のレポートによってまとめたが、大きな違いで感じるのは、ニュージーランドの保育者は子どもを信頼し、子ども自身に成長したい、学びたい意志があることに信頼を寄せている。日本はどちらかと言えば、「子どもに学ばさせる」「子どもに覚えさせる」「子どもに力をつける」ことが先導して、訓練的、指導的になりがちである。早期教育がそれを物語っている。そして「焦る」保護者がそれを良しとしている。乳幼児期に何が大切か、何が必要かを、もう一度、幼稚園教育要領や保育所保育指針を読み解いて、学生と共に考えていきたい。

最後にニュージーランド実習のレポートを提出した学生の協力に感謝する。

注

- (1) レイチェル・パーク等著 七木田敦等監訳『文化を映し出す子どもの身体』福村出版 p. 152
には、「ニュージーランドの幼児向けカリキュラム、テ・ファーリキでは、種々の検討を基にして、本物の道具を使うことの価値を明確に規定している。ハンマー、ほうき、フライパン、計算機といった物は、実際の遊びや仕事の場で意味のある学習機会を与えていると見られる」と書かれている。

引用文献

- [1] 八巻正治著『羊の国で学んだこと』学苑社 1995年
- [2] 七木田 敦、ジュディス・ダンカン著『「子育て先進国」ニュージーランドの保育』福村出版 2015年 pp. 8-12
- [3] レイチェル・パーク等著 七木田敦等監訳『文化を映し出す子どもの身体』福村出版 2017年 p. 191
- [4] 大豆生田 啓友等著『日本が誇る！ていねいな保育』小学館 2019年 p. 14

参考文献

- ・マーガレット・カー著 大宮勇雄・鈴木佐喜子訳『保育の場で子どもの学びをアセスメントする』ひとなる書房 2013年
- ・松川由紀子著『ニュージーランドの子育てに学ぶ』小学館 2004年
- ・エリザベス ハナン・ジョージ ラッキング著 IPA なごや訳・監修『ニュージーランドに見る子どもの遊びと遊び場』萌文社 1993年
- ・汐見 稔幸編著『世界に学ぼう！ 子育て支援』フレーベル館 2003年
- ・ルドヴィク・ガンパロ等編 山野良一、中西さやか監訳『保育政策の国際比較』明石書店 2018年
- ・泉千勢編『なぜ世界の幼児教育・保育を学ぶか』ミネルヴァ書房 2017年

(受理日 2020年1月8日)